

あびこの文化

発行人 大崎 洋
美崎 子市
我孫子 高野山
250-23
04(7182)
0861

放談クラブ

『日常の言葉と数の豆知識』を聴講して

稲葉 義行

十月十五日の放談クラブは、講師は元江東区立砂町小学校校長の太田功氏で講師がお書きになった「太田先生のちよつと豆知識」を基に解説していただきました。

○「皆さんは自分の誕生した日が何曜日か知っていますか？」との質問がありました。受講者全員がわからないので、二百年実用カレンダーを配布してそれぞれの誕生年に当てはめて自分の誕生日の曜日を当てはめて該当する曜日を確認しました。これを手始めに色々な豆知識を披露していただきました。以下、その内容を紹介していきます。

○日本では一般に休日を祝祭日と言っていますが、実際には祝日(年間十六日)はありますが、祭日というのはありません。

○閏月が二月なのはなぜか？それは、日本の暦は昔二月から始まり二月で終わっていたので、最終月で調整していたからです。

○「忠臣蔵の討ち入りの日は何日か知っていますか？」
討ち入りの日は元禄十五年十二月十四日となっていますが、正確には次の日の十五日の朝寅の刻(午前四時頃)に行



われたのですが、その時代は、旧暦が使用されていたので、現在の新暦に直すと元禄十六年一月三十一日の朝になります。

○「今年の干支(えと)は何ですか？」と聞くと「卯(う)」と答えますが、実際は正しくありません。干支とは、十干十二支(じっかんじゅうにし)といいますが、十干とは甲(きの)乙(きの)丙(ひの)丁(ひの)戊(つちの)己(つちの)庚(かの)辛(かの)壬(みずの)癸(みずの)を言い、十二支は皆様ご存知の子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥を言います。ですから令和五年の干支は「癸卯(みずのとう)」となります。このように、時代感覚が解つてくると歴史が理解しやすくなります。

○「三角形の内角の和は百八十度ですが、何故でしょうか？」それは一周、すなわち一回りが三六〇度だからです。どのような三角形でも、頂点と底辺に平行線を引くと三角形の角の合計は半周になり百八十度となります。では、どうして一回りは三六〇度なのか、一年が三六五日であることが関係しているようです。数千年前の人が一日一日を記す上で、農作物を作る上で、同じ季節が同じようにめぐって来るということが分かり円形に記していったのでしょう。それが一周三六〇度の目盛りとなつたのだと思います。三角形の角の合計の和が一八〇度であることが分かれば何角形でも角度が分かれます。

○「七月二十二日は何の日か知っていますか？」、ヨーロッパ等では「円周率の日」とされています。なぜか、欧米では日付を表すのは日・月・年の順に書きます。この時の7分の22は3.142857...が円周率3.14159...と近いので円周率の近似値の日としています。円周率とは円周と直径の長さを比較したもので、円周は直径の何倍あるかということです。約三倍あつてそれを円周率と決定しました。現在はコンピュータの発達により小数点以下十兆桁以上まで算出されているそうです。

○「ペットボトルは何語でしょうか？」和製のカタカナ英語で日本語になっています。ボトル(bottle)は英語で容器や瓶のこと、ペットは素材のことで、「ポリエチレンテレフタレート」を意味していてこれを「pet」と表記することから「PET BOTTLE」となつたようです。

○「銀ブラとは？」現代の人は銀ブラというと友人等と銀座を散策することと想っています。現在の辞書でもそのように説明をしています。昔は、小説家などの文士が銀座でブラジルコーヒーを飲むことを、銀ブラといったという説もあります。

○赤とんぼ(三木露風作詞 山田耕筰作曲)は日本を代表する名曲ですが、解釈を間違つたままで覚えてしまう人もいます。例えば、「おわれてみたのは」を「追われてみたのは」と思っている人がおられます。正しくは「背負われて見たのは」という意味で、姉や(ねい)に背負われながら見た赤とんぼということです。また「夕焼け小焼け」の「小焼け」とは何でしょうか。これは、夕焼けの後にもう一度空が紅く染まることなどの説がありますが、「こやけ」という言葉はどの辞書にも載っていません。語調を整えるためのものだと思います。

○東京の山手線の駅に「目黒」と「目白」がありますが、どちらも目黒不動尊(目黒区下目黒三丁目 龍泉寺)と目白不動尊(豊島区高田二丁目 金乗院)が由来の駅名です。そのほかにも、「目青不動尊(世田谷区太子堂四丁目 教学院)、目赤不動尊(文京区本駒込一丁目 南谷院)、目黄不動尊(台東区三の輪二丁目 永久寺)(江戸川区平井一丁目 最勝寺)があり、皆東京二十三区内にあり、「江戸五色不動尊」と呼ばれています。

○「卵」と「玉子」の違いは？明確な基準はないようですが、基本的に生物学的には「卵」、調理されたものや食材として使う場合は「玉子」のようです。「卵」は動物卵全般を指し、「玉子」は食用を目的として、主に鳥類の卵を指すようです。しかし、「卵焼き・玉子焼き」な

ど両方使う場合もあります。

〇「ハンコ」と「印鑑」はどう違うのでしょうか？この両者は全く違います。「ハンコ」は名前が彫つてある物体そのもので、印章とも言いますが、「印鑑」は「ハンコ」を押して紙に残つたものを言います。

知っているつもりで話している事など、講師の著書を基に楽しくお話いただきました。学校での堅苦しい授業に比べ、楽しく印象に残る内容でした。



「砂町中学校時代の思い出」

芦崎 敬二(会員)

今回の放談くらぶ「日常の言葉と数の豆知識」を開催するにあたって、講師の太田功氏は、私の中学校時代の恩師です。

一年ほど前から先生をお誘いして、年に数回ランチ会、丸八通りランチ会と称して同級生三人と開いています。

そうした中、昨年のある日のランチ会の後で、池袋のサンシャインシティビルの一階でのお茶会で、先生がその年に上梓された書籍『太田先生のちよつと豆知識』を私たちにプレゼントしてくれました。

お茶会では、「自分が生まれた日の曜日を知っているかい」との質問で始まりました。私も同級生も誕生日の曜日などは知る由もありません。太田先生は、年間カレンダーは一四種類しかないと言い、二〇〇年カレンダーの表を手にして、先生の話に次第に引き込まれて

いきました。

いつの間にか、中学生時代の先生の姿を思い出し、懐かしい気持ちになりました。

私が生まれ育ったのは、江東区北砂町という所で、当時、江東ゼロメートル地帯と呼ばれていた地域でした。大雨や台風時には、排水能力が低い時代でしたので、時には大人の胸のあたりまで水が上ったこともあり、私の中には浸水や台風がこの頃からトラウマになっています。

私が住んでいた北砂町は、江戸の水運の大動脈である「小名木川」の脇で「砂村」と呼ばれ、江戸の消費地に砂村ネギなどの農産物を生産供給する農村で、明治時代以降は日本の近代工業を支えた工場地域で、当時は「えんとつの町」と呼んでいました。

その様な工場が大量の地下水をくみ上げ地盤が沈下した歴史の影があります。

私は、昭和二八(一九五三)年生まれで、砂町中学校(以下「砂中」と略)入学は、昭和四一(一九六六)年です。丁度、ザ・ビートルズが隆盛の頃で、この年の六月に来日し、武道館でコンサートを開きました。二年前の東京オリンピックの柔道のために建てた神聖な施設ということで、流行の音楽会開催に強烈な反対意見が出て、世の中大変だったことが頭の隅に残っています。

その東京オリンピックのレスリングに出場を目指していた方が砂中にいて、筋肉隆々の若い男性、体育のS先生です。一年生に入学したての初めての体育の授業で、体操着を忘れて来た生徒がいたので、理不尽にも二グラスの男子全員が上半身裸の下着のパンツ一枚にさせられて、学校の外の近所の道を一列に並んで走らされました。

この体験で、中学校は小学校と全く違う、厳しい所だと一気に意識が変わりました。

他にも地理のY先生は、大判の各種地図を黒板の上のフックに掛ける「地図掛け棒」で、態度や姿勢の悪い生徒を見つけては、男女の区別無く頭や手の甲を叩きました。

今では、教員による暴行・暴力、ハラスメントの極みの行為で、事件になりますが、当時は中学校は厳しい所だと言う感覚でした。人権意識や人権思想が薄かった時代だったと多くの人は見ていたかも知れません。

そんな中、太田先生は、初めのうちは、目付きの厳しい怖いイメージの先生でした。

しかし、生徒が問題を起こしたりすると、話の筋道を立て、理屈で生徒自身に分からせる格好良い先生でした。表立って味方するものではありませんが、生徒を信頼している心のスマートさを教えてくれました。

砂中を卒業して五五年になりますが、今よりも人としての繋がりが濃厚な時代で、安心できる社会だったと感じています。

欲に目を奪われるのではなく、人と人との信頼で、穏やかに生きられる社会を築いていきたいものです。

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」略称(美手連)活動に参加して(第6報)

牧田 宏恭(会員)

「美手連」の活動についての報告は、第1報を「あびこの文化」第190号に掲載。第2報を「あびこの文化」第191号、第3報を「あびこの文化」第193号に、第4報を「あびこの文化」第194号に、第5報を「あびこの文化」第195号掲載させていただいた。続く今号(196号)には第6報として、本年9、10月の主な活動内容などを紹介する。

1. 都部谷津(いちぶやづ)における特定外来生物(植物)観察実施

9月25日、第4月曜日「谷津ミュージアム」と近辺で上記の観察を行い、「ナガエツルノゲイトウ」以下(「ナガエ」の地区別の生育・分布と、実施中の「遮光シート」による生育抑制効果)を調査していることは紹介済みである。この行事には、毎回、千葉県生物学会の先生、千葉県中央博物館の先生、岡発戸・都部の谷津を愛す

る会のメンバー、美手連のメンバーが参加しており、今回は総勢11名の参加であった。

当日は、今夏の異常なまでの酷暑から抜け出し、先ずは快適とは言えないものの、晴天に恵まれ、じつくりと観察できた。

「ナガエ」の強い生育力には驚かされる。「遮光シート」の効果は十分に認められたが(写真1)、シートの周囲は繁茂した「ナガエ」、そして、シートを固定した「土嚢袋」の中や下からその蔓が顔を出し、増殖している(写真2)。また「ナガエ」の切れ端を入れておいた「袋」からは、袋を破って「ナガエ」が覗き、「袋」の中には「ナガエ」で埋め尽されている(写真3)。「水田」の周囲には農家が「除草剤を散布後、「ナガエ」のみが、発芽・成長しているのが見られる。

また、「ナガエ」が「水田」に入り、刈り取り時期を迎えた稲に覆いかぶさる状況が、刈り取り作業が行なわれるの



写真1



写真2



写真3

写真4



か危ぶまれる(写真4)。以前にも紹介したが、手賀沼の水路を覆いつくしているところから、その際立った生育力が見て取れる(写真5)。このような



写真5

施しようが無い。この様に「ナガエツルノゲイトウ」は、黄色の花を付ける「オオバナミズキンバイ」とともに、自然環境を著しく悪化させる危険植物だ。両者共、水生植物といわれるが、陸上でも生育する厄介者「特定外来生物(植物)なのだ。行政が一刻も早く「駆除対策実施」を実行に移すことを願うばかりだ。

2. 手賀沼・高野山新田地区に増設中された「植生帯」について

「千葉県柏土木事務所」発注により、工事期間(5月24日頃〜10月10日頃まで)とパネル表示し、実質7月末日ごろ着工し、8月24日(木)まで続けられた「植生帯増設」には、今のところ変化なく、植物は見られない(写真6)。

3. 「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物等」について他



写真6

既報「あびこの文化」にて報告済の標記の件は、その後、具体的な改善とみられる動きが、現地に見られない。去る5月26日に行った「美手連」による「千葉県柏土木事務所」訪問、この実態をまとめた資料を以て申し入れを行ったことに加え、再度「要望書」による「改善実施の実行」を申し入れる予定である。この件は「我孫子市に留まる案件ではなく「手賀沼流域」全地域に関係する案件と考える。(その写真は会報194、195号参照)

もう1件、「千葉県柏土木事務所」関連では、会報前号に触れた「ウエイクボード」対策実施について「要望書」提出も同時に取り上げる案件である。

4. 豊かな手賀沼を目指すデジタル教材づくり事業

小学校4年生程度以下の児童を対象に「美手連」に参加している団体の手により制作が進行中の、「豊かな手賀沼を目指すデジタル教材」は、既に完成した今年度前期分7作品に続く後期制作が進行しており、「我孫子の文化を守る会」では、「手賀沼に集まった文化人たち」と題し、『嘉納治五郎、志賀直哉、武者小路実篤、杉村楚人冠ほか』について「なぜ彼らは手賀沼に集まったのかその少年期は?」など、今まで話題にされなかったことに触れる内容での制作を進めている。すでに完成済みの作品について、「柏市教育委員会」「同図書館」そして「我孫子市教育相談センター」が、その内容に大きな期待・評価を寄せ、「教材としての活用」の進捗に向けての、打ち合わせが「美手連」と行われ、教育現場での早期活用が具体化進められている。

5. 手賀沼の水の残留農薬分析

ネオニコチノイド系農薬の好感度分析、グリホサート除草剤残留分析について、手賀沼沼辺5か所採水(本年3回目)を実施した。分析結果を専門家により解析し、今後の指針を得る必要がある。

6. その他

その他、美手連が事務局で実施される「手賀沼フォーラム」事業には多くの催し企画があるが、そのうち「我孫子の文化を守る会」が企画・実施する「川巡りと木下史跡散歩」は、悪天候のため、一週間繰り下げ10

月17日(火)に実施された。

また12月3日(日)に「美手連主催で、手賀沼流域の「我孫子」「柏」「印西」「白井」の各市と「水環境保全協議会」の協力の下、実施される「手賀沼統一クリーンデー」がある(8時30分手賀沼公園広場集合)。各市市民、ボーイスカウトの他「美手連」会員各団体の多くの参加を得て行われる。「市民」は決められた区域の「み拾い」を、「美手連」の参加者は、「ナガエ」などの排除を担当する。「多くの参加者が望まれる」「我孫子の文化を守る会」は、「ナガエ」などの排除担当になる予定である。

7. 終わりに

特定外来水生植物「ナガエツルノゲイトウ」繁茂問題は、全国的に取り上げられつつあり、先日(10月16日)にはテレビ朝日「系列局のニュース番組にて、詳しく取り上げられており、駆除対策が急務であると強調していた。今後の流れに注目していきたい。また、近年、手賀沼湖面から、忽然姿を消した手賀沼の「ハス」。何故なのか。前述の「残留農薬」の影響があるのか?人間に、自然に影響を与えるものなのか?その真相を早急に追求する必要がある。

「亭南に王城を建つべし」「将門記」より

我孫子の文化を守る会 戸田 七支(かずゆき)

将門記について各分野より綿密な研究がなされ、既に完成された感がある。しかし小職にとつては納得しがたい所があり、これを明らかにして先輩諸氏のご批判を仰ぎたいと思う。坂東市本将門記p8に次の記述がある。「…其記文に云く、王城を下総国の亭南に建つべし。兼て機橋(ウキハシ)を以て号して京の山崎と為、相馬郡大井の津を以て京の大津と為(セ)む。…」と書かれている。この文章の存在は殆んどの人が知っている。しかしその重要性について知る人は多くない。将門が自らの言葉で決意を述べたもので、将門記に於いて白眉をなす重要な記述と思う。理由を述べよう。

「王城を下総国の亭南に建つべし」とある。これは下総国の将門亭、将門の居館の南へ王城を建てようとの意

味、将門亭の真南には将門城(日秀城)がある。これを将門の居城にふさわしい王城にしようと考えた。場所は現在の将門神社が有るところ―我孫子市日秀180番地「下総国亭南に…」将門亭は王城の真北、官道と交わるところ。東西にズレたら亭南をハズレルことになる。現在の湖北地区公民館あたりと考える。―我孫子市中里81番地3号

「機橋を以て号して京の山崎と為」と書かれているが、王城の山道を下ったところに機橋、船着き場がある。このあたり一帯を機橋と称して京の山崎になぞらえた。兼て機橋(ウキハシ)を以て…とあるが、アワセテ機橋を以て…と読むべきであろう。老人施設、久遠苑のあるあたりと考える。―我孫子市日秀208番地

「相馬郡大井の津を以て京の大津と為(セ)む。」とあるが、柏市大井福満寺 周辺に展開する地域が符合する―柏市大井1708番地。将門亭、王城、機橋(京の山崎)、大井の津(京の大津)とその存在が不明であった地点が明らかになった。これ等の場所はいずれも手賀沼周辺8kmの処にあり、京の山崎、大津に例えられた景勝地である。実際は京のそれらと比べれば賑わいもなく貧相なものと言えよう。武力に優れた将門にすれば王城は強大で難攻不落のものを目指すべきと思われるが、将門が相馬郡に夢見たものは小さなユートピアにすぎない。平和で優しい将門の姿が見える。前項において突然日秀城、王城が出現し驚かれたと思うが将門を理解するには 重要なことです。日秀城イコール王城であり、その中心が将門の王城である。日秀城イコール王城とする根拠を述べよう。赤松宗旦著利根川図志(尚書房64p竹袋城山の項に次のように書かれている。香取郡牧野長者の娘に小宰相と云うものがいた。後に将門の寵愛を受け、この城に召し寄せられた。今も古い井戸の跡があると…。将門の愛妾桔梗御前のことであろう。将門の出城、桔梗御前、井戸の存在が明らかになった。この竹袋から西へ16km、柏市大井福満寺には将門の城山あり、愛妾車御前の住まいと鏡の井戸が存在している。我孫子市日秀はどうであろうか?将門の正室が住んでおり、

将門の井戸がある。そこには将門の本城、日秀城、王城がなければならぬ。これで将門の日秀城、王城の存在が理解されたことと思う。場所は今の将門神社が鎮座している処、物語の中心の中心と言えよう。

王城の所在地(日秀城)が判明すれば他の事象は容易に理解できるであろう。将門が関八州を制覇し、王を宣言したのは天慶2年12月15日、貞盛・秀郷連合軍に討たれたのが天慶3年2月14日。あまりの早い幕引きであった。人々は悲劇を一日も早く忘れようとしたのか、全てを忘却の彼方へ追いやった。神社の祭祀すら執り行わない決まりとなっている。

あとがき

将門の愛妾桔梗御前を語るとき、我孫子周辺に住む人々の中には桔梗御前を悪く言うことが多い。「桔梗を植えても花は咲かない」、「敵側に情報を知らせた裏切った」などと桔梗御前を悪く言う事が多い。これは正室の桔梗御前に対する嫉妬心がなせるものとすれば理解できる。正室、桔梗御前、将門、三人の人間模様が日秀を中心とした場所で繰り広げられたことを示している。桔梗御前について更に一話加えよう。秩父山の山奥に九十九神社がある。将門の関係者が秩父の山中に逃げ込んだが、敵側に見つかり女子供を含めて99人が虐殺されたという伝説が九十九神社とともに残っている。この犠牲者の中に 桔梗御前が含まれている(桔梗塚がある)。これは桔梗御前が仲間とともに逃げて来たことを示している。若し桔梗御前が悪女であったなら、この集団逃避行に加えられる事はない。桔梗御前悪人説は存在しない。

最後に将門記にある「…亭南に王城を建つべし…」の文中にある将門亭、王城、機橋、大井の津の所在地について多くの人が解明を試みているがその場所を特定する事が出来ない。結論として将門が計画を進めたものに過ぎなく、どこそこの土地のことかと詮索することは意味がないということになっている。これにたいして将門亭、王城、京の山崎に比定した機橋、京の大津に比定した大井の津、これ等の所在地を解明し、ことごとく地番を付けて提案した次第です。広く御批判を仰ぎたい。

(連載第5回)

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知るとのめ》
空穂先生が、聚文画室に和周を見舞った
日のこと―歌の師空穂と和周のたどった道

平林 清江 (会員)

画家 歌人 原田京平とそのファミリーの旧宅跡地
(現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘
四一九三三六) 探訪・取材の記

表現はたやすくはない。その人の実感は、
その人にして誠実を持つてゐる限り、
当然客観性があるべきはずだ。

窪田空穂著 自選歌集「槻の木」巻末記
大正十四年 十一月

はじめに

私は原田和周の「人と短歌」を理解し、
かつ語れるのか？

原田和周の遺歌集「雲の流れ」を前に、私は「和周の
人と短歌」について語ることが出来るのか、という自問
が湧いて出たのである。

私も、かつて、二十代の若い日に、わずかな短歌を
詠んだ事がある。しかし、和周の目指した歌の方向と、
私が影響を受けた歌の方向とは、随分と異なっている
のである。

都内にある私立大学の文学部の学生として私が過
ごした、一九六七年から一九七一年の四年間の時代
背景といえは、燎原の火のように盛んな学生運動があ
り、また、卒業の前年の十一月、三島由紀夫自裁のニ
ースを、隣町の四谷の校舎の教室で、リアルタイムに聞
いたこと、「三島が死んだ！」と誰かが叫び、上級の男
子学生が泣いていたことなどを、今でもはつきりと思
い出すことが出来る。社会の事には鈍いのか、女子
学生であったが、ごく近い将来、漕ぎ出してゆかねば

ならない外の世界の不安を感じ取るには、充分過ぎる
ほどに社会は激しく、速く動いていた。

やがて、卒業後しばらくして、塚本邦雄の短歌に出会
い刺激を受け、独学で短歌を作り始めた。生きること
の不安を鎮め、生きる力を得るために、前衛短歌の旗
手と称された塚本の歌の力を選んだと言つてよいだろ
う。都内のある二つの結社に短期間属したことはあつ
たが、作る悦びを実感できたのは、やはり、塚本の歌
の刺激によつてであつたから、結社からは離れた。

結婚後の一九七八年、「サンデー毎日」の新年企画、
第二回「現代百人一首」に投稿、選外秀作ながら一首
採られ、その年の夏、優雅清新なる総合版「一九七八
年版現代百人一首」(発行 政田岑生 季節社)に入れ
られた。この時の撰者が塚本邦雄であつた。当時人気
の高かつた塚本の撰ということ、多くの若者が自作
を寄せ、掲載された歌の半分が、二十代から三十代の
青年の歌であつたという。

塚本による「序」には、次のような賛辞が盛り込まれ
た。「フレッシュな作者群と、その目をみはらせるやう
な技法は新しい新古今調」で、「定型詩のはるかな沖に
豫期しなかつた新しい波頭が、高らかなひびきをとも
なつて押し寄せてくるのが見える」とあり、名も無き
若い歌詠みたちを、さらに鼓舞したはずである。特に、
愛蔵本には、次の塚本の染筆の一首も入れられた。

われら浪漫派のするを生き残雪の
飛驒よりとどく白緑の獨活

さて、わが一首は、と言えは、憧れの塚本に作品以
上の短評を添えてもらい、これをわが青春の金字塔と
し、そのことを最後に、結婚生活の現実にまみれて、
短歌からは遠ざかり、やがて全く歌を詠まなくなる
という、いわば、お定まりの道をたどつたのであつた。
二十代の終わりのことであり、短歌に馴染んだのは、
わずか十年足らずの間であつた。しかし、全く歌が詠
めなくなった現在でも、浪漫派の系譜に列なる塚本邦
雄の歌に触れた、若い日々の記憶が蘇ることがあるの
である。

このような私が、歌人窪田空穂の系譜に列なる、
「原田和周の人と短歌」を語ることとは、いささか
面映ゆくもあり、見当違いの感がするのである。何故
なら、原田和周が生涯師と仰ぎ、「人生の指針」とも
敬慕したのは、歌人窪田空穂(以下空穂)である。空穂
の作歌の歴史を辿ると、「自然主義文学の大きい波を
くぐり、それを身につけ、人生を直視する振幅の大き
い抒情詩としての短歌を、生涯をつらぬく歌風の根幹
とした」、いわゆる「人生・生活の実感を重んじた境涯
派」の歌人である。その歌人の系譜に列なる原田和周
の短歌を味わい、理解し、語ることが相当困難なこと
だ、と思わずにはいられなかつた。つまるところ、私に
は荷が重いのである。

「境涯派」と「浪漫派」の短歌を作ることの行き着く
先に、何を求めるかということに大きな相違があり、
互いの終着点において、両者は交わることが無いよう
にも感じられるからである。

しかし、原田和周という「画家として芸術への熱意を
内に秘めた静かなる人」への、理解と共感、人一倍持
つてゐるつもりであるから、そのことを頼りに、原田和
周の「人と短歌」に少しでも近づくことが出来るのでは
と私自身を励ましてみた。以下は、そうした心で試み
たところの「原田和周の人と短歌」の小論である。

一、原田和周の「人と短歌」について

(1) 窪田空穂の序文から見た、原田和周の

作歌の経歴

わしゅう

原田和周(Ⅱ京平・以下和周)の短歌の師、窪田空
穂(以下空穂)(注1)の回想によれば、和周が短歌を
作り始めたのは、「大正七年頃」からとのことである。
それは、明治二十八年、現在の浜松市生まれの和周が、
洋画家を志し上京、大正三年、日本美術院洋画部に
籍をおいて数年経た頃のこと、ということが理解さ
れる。

そこで、本稿では、和周の遺歌集「雲の流れ」に寄せ
た空穂の「序」の中で、和周の歌の経歴に触れた次の箇
所に沿つて、和周の「人と短歌」について語ろうと思う。

原田君の作歌は大正七年から始まつてゐて、十九年間に亘つてゐるのである。初めの三四年間の歌はいはゆる習作とも称すべきものであるが、大正十四年頃の歌から、俄に進歩の跡を見せ、一家の風格を持ったものとなつてゐる。その後の歌は、一直線に進み、深まり、広まつて、時に感嘆せしむるものとなつてゐる。

〈序〉

ここに記したように、和周の短歌が「俄に進歩の跡を見せ」とされる大正十四年頃とは、空穂系短歌雑誌『白樺（しらがし）』（注2）に、和周が同人として参加をした年を指していると言えよう。原田喬氏所蔵資料（注3）の中に、和周が描いた『白樺』の表紙絵の原画が残されていることから、和周が同会にかかわりを持っていたことが理解できる。

ところで、和周が牛原睦（後の原田睦）と結婚した大正十年頃には、すでに和周は空穂と出会つていたであろうことは、想像が可能である。なぜなら、睦はその女子美術学校（現 女子美術大学）在学中に、同校の講師をしていた空穂の教えを受け、大正六年に卒業した後、空穂に歌や詩を習つていたからである。

よつて、空穂と和周の交流は、大正十年頃には始まつていたことが想像されるが、筆者は、正式に『白樺』同人として空穂に師事したのは、やはり、大正十四年頃ということになると考えている。おそらく、和周は大正十四年ころから逝去する昭和十一年まで、『白樺』と『地上』第二次（注4）の両方に参加し、かわりを持ちつたと考えられる。この間の「十余年」（注5）にわたり、空穂や同会の歌友らと交流し、その結果として和周の歌が「俄に進歩」し、その後の歌は「一直線に進み、深まり、広まつて、時に感嘆せしむるものとなつていった」ということが考えられる。

（2）二人の歌友の追想文から見る、

和周の「人と短歌」

和周の投稿歌の数は余り多くなかつたようだが、表紙絵なども描いて参加し、歌友らの信頼も厚かつたよう

うだ。やはり、空穂の弟子であり『地上』初期からの同人、割田斧二（わりた おのじ）（注6）が書いたものに、「原田君は短歌にたいしては謙虚であり、発表もせず、独りノートに記して之を楽しんでゐた」というのがある。さらに、「原田君は大きな体軀をしてゐて物静かな、唯に優しき、そして無口な性格であつたが、心深く蔵する純な熱情は何物も貫かずばやまぬ底のものがあつた」（『地上』第二次 昭和十一年八月号）と、和周を偲んでいる。この割田については、和周に似通う素朴な人柄でもあつたようで、この人の和周観は好感が持てると同時に、説得力があるように思われる。殊に「原田君は短歌にたいしては謙虚であり、発表もせず、独りノートに記して之を楽しんでゐた」という、和周に対する評は適切で重要なポイントである。

また、『白樺』時代の同人宇都野研（うつの けん）（注7）による和周の「人と短歌」については、「如何にも目立たない歌であるが素直で内気で純情であるところ、正に同君の身から出たもの」「歌誌『勁草』昭和十一年八月号」とある。なお、この「正に同君の身から出たもの」とは、遺歌集『雲の流れ』に寄せた空穂の〈序〉の中の一節を踏まえたものと考えられ、和周の「人と短歌」の特色を知る上で、特に重要なヒントとなると思われるので後に取り上げることとする。

ともあれ、和周の作歌は、〈最後の歌〉十一首（注8）に見られるように、その死の直前まで続けられた。十九年間の長きにわたつたその作歌の持続性が、才能と言つてよいであろう。さらに、和周がその死の直前まで静かに情熱を燃やし続けたことは、歌に宿る和周の、生への静かなしずかな強い意志とも言えるのではないだろうか。

二、空穂先生が、聚文画室に和周を見舞つた

日のこと

（1）「評伝 窪田空穂」の記述から

その最晩年は画家でありながら、視力を失い、短歌を作ることを心のよりどころとし、安らぎとした和周であつた。画家として、自己の芸術の模索の苦悩と病

との闘いを抱えながら、一方で、和周の短歌の調べの清澄さとリズムの安定感がそのことを伝えていようと思われる。

和周は、昭和十一年一月十六日、満四十歳の若さで病没したが、その死に際し、空穂は「親しみと悲しみのまじる心で見舞つた」という。二・二六事件の一月ほど前の、東京の空に、シベリアからの冷たい風が吹き付ける日のことで、見舞つた場所は、和周終焉の場所として、最近判明し確定ができた、「聚文画室（しゅうぶんがしつ）」（旧原田和周のアトリエ兼居宅、現在の加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都世田谷区桜丘四一九一三十六であると思われる）。

画家原田和周が死んだ。空穂とは女子美術学校時代の同僚である。日本画の弟子で、空穂に歌を習つていた睦子という人がいて、和周と結婚した。睦子はのちも歌を習いに来た。『地上』の表紙に帯地に絵を書いたのがある。和周の作だ。和周は旅行中に眼を患つた。

直線が引けない病氣である。そして、死んだ。若い妻と女子二人がある。空穂は親しみと悲しみのまじる心で見舞つた。寒い冬で、新聞では寒波という言葉をつかつたが、シベリアの風が東京の空を吹いて、夜はしんと冷えた。

「評伝 窪田空穂」

短歌を介しての空穂と和周との交流については、やはり空穂の弟子の村崎凡人（むらさき ぼんじん）の著書『評伝 窪田空穂』（昭和二十九年七月一日 長谷川書房）がある。

この評伝は「空穂や空穂の友人らからの聞き書きを交え、初めて生涯をたどつた評伝（現代短歌大事典「三省堂」二〇〇六年六月一〇日）ということであるが、しかし、記述には少し分かり難いところが散見されるので、いささかの修正を加えながら解説したい。

まず、この記述には、空穂と和周とは「女子美術学校時代の同僚」とあるが、「雲の流れ」に掲載の〈和周略年譜〉と、発行人の原田睦による〈あとがき〉でも空穂

と和周とのかかわりについてふれているが、この記述は見られない。「雲の流れ」は、和周の逝去後、妻の睦が編さんし、昭和十一年五月に刊行、生前親交のあった友人知人らに贈られた遺歌集である。さらに、空穂の著作から和周についての記述を探してみたが、次の三通りの表現はあるが、そもそも、「女子美術学校時代の同僚」という表現は見出せなかった。

「洋画家の原田和周君」

随筆「珍らしみと懐かしみ」(短歌雑誌「槻の木」昭和十一年三月号 初出)、随筆「珍らしみと懐かしみ」(窪田空穂全集「第六巻 紀行・随筆」昭和四十年六月十五日 角川書店) (注9)

「美術学校出の青年洋画家原田聚文君」

自歌自釈(手賀沼) (窪田空穂全集「第七巻 歌論」三自歌自釈 鏡葉 手賀沼 昭和四十年十月十五日 角川書店 初出) (注10)

「洋画家原田和周君」

〈序〉(原田和周著遺歌集「雲の流れ」昭和十一年五月初出)、〈原田君の歌集「雲の流れ」〉(窪田空穂全集「第十二巻 近代短歌論」昭和四十一年九月十五日 角川書店)

「原田についての記述が無い」

随筆(女子美術学校) (窪田空穂全集「第六巻 紀行・随筆」三つが文学体験 女子美術学校 昭和四十年六月 角川書店)

空穂は、明治四十四年四月、本郷区(現 文京区)菊坂の女子美術学校(現 女子美術大学)の講師となり、大正四年の秋同校を辞している。

空穂三十五歳から三十九歳までのことで、同校での受け持ちの科目と時間は、「国語と英語で、女学校上級二組、卒業後美術部合併が一組であった。講師として週二日、給料十五円で、一時間五十銭が相場であった」(女子美術学校)とある。

一方、牛原睦は、大正三年三月、同校日本画科高等師範科に入学し、大正六年四月同校を卒業している。よつて、睦は、大正三年三月から同四年の秋までの間に、空穂の教えを受けたことになる。睦はその学生時代、空穂に短歌や詩を習い、また、卒業後も習っていたが、和周との結婚の前後、あるいは大正十年頃には、空穂に和周を引き会わせたということが考えられる。あるいは、それ以前、和周が同人としてかわり、表紙絵を描いたという『地上』(第一次)において、空穂の指導を受けていたということも考えられるが、この『地上』(第一次)については、和周がかかわっていたかどうかは、現段階では、確定できていない。

次に、和周の眼病の表現については、「直線が引けない病氣」という表現は適切ではなく、ものの線が歪んで見える眼病をわずらったのではないかと想像している。このことは、和周の遺歌集「雲の流れ」所収の〈最後の歌十一首〉中に、〈日々ながらす戸の骨へなへなど曲りはげしくなりては見ゆる〉という一首からもうかがえるが、昭和十一年当時では、現在のような医療機器もなく、正確な病名は分からなかったのではないかと思われる。

また、和周の作として『地上』の表紙に帯地に絵を書いたのがある」という記述があるが、筆者は歌誌『地上』の表紙絵は未だ見ていないが、原田喬氏のお宅にて、和周逝去後妻の睦が、二人の娘を育てる為に、実際の帯地(白羽二重など)に、油絵の具で繊細な花の絵を描いたという作品を拝見したことがある。たいへんデリケートなタッチのもので、美しい作品である。睦は和周の表紙絵からヒントをもらったのであろうか？

やがて、和周は視力を失い、昭和十一年一月十六日、満四十歳で病没。

シベリアよりの風が東京の空を吹いて、夜はしんと冷えた。二・二六事件勃発の一ヶ月前のことである。

若い妻(睦)と女子二人(麻那、南)がのこされた。

さて、次の四首はいずれも、その頃の空穂の作で、短歌雑誌『槻の木』(昭和十一年三月号) (注11)に収載されている。

シベリアより来にし寒波の底知らぬ
此寒けきや身にしみとほる

厳寒の幾日をつゞきゆるみ来ず
風邪引くなゆめと子ら誠むる

身の弱さははれむ心我が持ちて
朝の食卓に子らが顔見つ

原田和周君の計に接す

人死にて値限なし若き妻

幼き子等の誰にかは依らむ (初出)

なお、最後の〈人死にて〉の一首は、和周逝去に際して詠まれたものであるが、わずかな修正が施されて、空穂の第十三歌集「郷愁」(注12)の昭和十一年の項〈折々に〉にも収められている。

画家原田和周君の計に接して

人死にて値限りなし若き妻

をさなき子等の誰にかは依らむ

(窪田空穂全集「第二巻 歌集」II

昭和四十年七月二十五日 角川書店)

この後も、僅かずつの修正をしながら、何度か詠まれた歌のようである。そのことから空穂と和周との交流の深さが想像できるが、その全容を筆者はまだつかめていない。

三、和周の短歌の鑑賞―我孫子在任期

(大正十年から昭和三年まで)の作品から

和周の遺歌集「雲の流れ」は、和周逝去の年の昭和十一年五月、妻睦により編さん・発行されたが、掲載された短歌三五二首(最後の歌十一首を含む)、三首の長歌(注13)は、師空穂への敬愛の念と深い傾倒の心から、創作が試みられたものと言えるであろう。和周の短歌の鑑賞に入る前に「短歌の鑑賞とは何か」ということについて、「窪田空穂の短歌」(窪田章一郎著 平成八(1996)年 6月8日 短歌新聞社)から次の一節

を引用する。

「短歌の鑑賞といふこと」

短歌の鑑賞といふことは、作者の胸中にいだいていた思いを、短い言葉をとおして読者の胸中に再現してみようとすることだと思ふ。一首の短歌を媒体として、人と人との心の交流が直接に成立するように感じる。この文学のいとなみを鑑賞と呼んでいいのである。

万葉集や古今和歌集のような古代の歌集中には、作者名の伝えられない歌が約半数を占めているが、遠い過去の誰とも知れない人の歌をとおしても、人と人との間に、じつになつかしい交流がおこなわれる。短歌はこのような親しさを味わわせる。これが短歌の長い歴史をつくり、伝統の基本になっていると考へられる。この意味において、短歌を学ぶということは鑑賞にはじまり鑑賞に終わるといっていいだろう。

そこで、読者としての私たちは、和周のそれぞれの歌に込められた思い、和周の心のなかのさまざまな様相・様態を、歌を通して感じてみたいと思ふ。

はたして、和周にとつての短歌とは、我孫子手賀沼畔居の日々、沼の面に向き合い、自己を深く内省し、沼の辺の葦がそよぐように和周の心のゆらぎそのものの表現であつたはずである。沼辺の一本の葦は、時にやさしくそよぎ、時に激しく風雨にもみしだかれながらも、いかに生きたのであろうか。それでは、和周の歌に沿いながらまず、原田和周・睦夫妻の暮らしをみつめてみよう。

期間は我孫子在住期の大正十年十月から昭和三年三月となるが、その理由は前述したように、「和周の作歌は、大正七年頃から始まつてゐて、十九年間に亘つてゐるのであるが、大正十四年頃の歌から、俄に進歩の跡を見せ、一家の風格を持ったものとなつてゐる。その後の歌は、一直線に進み、深まり、広まつて、時に感嘆せしむるものとなつてゐること、また、この期間の作品は、主に手賀沼及びその近辺の風景に限られていて、印象派系統の画家和周の眼差し、心象風景は読

者もイメージし易いという点からである。

さらに、我孫子在住の筆者にとり、原田和周・睦夫妻が、世田谷に移住した昭和三年からの作品は、テーマがさまざま、皆様にお伝えするには、未だ力不足で、勉強が必要だという理由からである。

①大正十年 新婚生活の歌二首

泣きいづる妻を愛しみかきいだき
言葉を無みしばかと云ひしか

目の前のもの、なべてのさびしきに
たはむれすなりなげきを妻よ

和周・睦夫妻は、大正十年十月(和周二十七歳・睦二十五歳)、居を東京目黒から千葉県我孫子町子の神に移した。移住の目的は、和周の静養と絵画制作であつたが、我孫子での新婚生活の最初の家となつた、島田久兵衛別荘(注14)のある、手賀沼畔の環境は随分と淋しいものであつたようだ。さびしいと云つては泣く妻を、思いやる夫の細やかな愛情が伝わってくる。何気ない二首であるが、実は、和周の歌としては、珍しく甘やかな歌なのである。

②手賀沼の歌 十二撰

遺歌集「雲の流れ」の中から、大正十年から昭和三年までの我孫子在住期に、和周が我孫子の風物を題材にして詠んだ短歌八十八首をピックアップしてみた。さらにそれらの中から、手賀沼の風景を題材にした、淀みの無い、均質な、殊に完成度の高い十二首を撰んでみた。印象派系統の風景画家和周が最も得意とした自然詠で、その和周のまなざしがとらえた手賀沼辺の景色が題材であるが、和周の心のゆらぎの投影としての、さまざまなかたちの葦のさまが詠み込まれている。

大正十年

きし月居を千葉県我孫子に移す(子の神)
雲母なす朝霧こめて手賀沼は
眠れるままに船渡すかも

我孫子の項の冒頭に載せられている。和周一家が住んだ家の周囲は、余りにも淋しい環境であるが、静かに暮らせる土地に居を構えて、まずは心満ち足りた和周の第一声とも受けとめられる。筆者はこの歌を和周の代表歌としてよいのではと考えている。

大正十一年

我孫子(三) 驟雨

雨や来るとおどろき見れば沼の葦
横様になり身をもみてゐる

我孫子(四)

こほろぎの声ほそくして夜霧たつ
沼辺の道の行く行く寒し

〈こほろぎ〉は、和周の好みであつたようで、後に、東京世田谷五丁目に画室を得てから詠まれた歌にも何度か登場する。

雨の沼眺めつゝ居ればわがこゝろ
見つむるごとくわびしきかさむ

大正十四年

我孫子(六)

沼の面にうつる向うの丘の影
あまりすみたりすみのさびしき

にほとり
鳴鳥のあそべる見ると枯葦に
ひそみてをればしづかなるかも

冬ミサの光ともしく氷田の

くろの枯れあし人の刈る見ゆ

こおりだ
〈氷田〉について、少し解説をしておこう。この〈氷田〉を厳寒に氷が張った田んぼと解釈しても良いが、我孫子ならではの冬の風物詩として、次の事柄も言えそうである。

我孫子町側から見沼(手賀沼)向こうの大井地区(現柏市)では、明治中頃から昭和初期にかけて、湧き

水を使った天然氷を作っていた。

製氷池に水を張っておくと寒中には、立派な氷ができた。この製氷池のことを「氷田」と言ったものと思われる。この池でできた氷を貯蔵しておくのが氷蔵で、四月になると、各地の販売所に舟で送られた。志賀直哉が我孫子で著した小説「和解」にも、瀕死の赤子慧子のために、対岸の氷蔵まで氷を買いに舟を出すシーンが描かれている。

参照：『歴史ガイドかしわ』（柏市教育委員会
平成19年3月発行）

大正十五年

沼畔居詠

藁かともまがふ声なり葦の間に
いね入るまでを鳴くかいつぶり

家にて

帰路を坂おり来ればしろじろと
夜のまほらに沼ひろごりぬ

我孫子（七）

枯れあしを刈りをさめたる沼の辺の
あらはになりて見るにさびしき

昭和二年

我孫子（八）

葛飾の春は深みて沼の葦
ゆたかにのびてよしきりの鳴く

我孫子（九）

今日のなぎに潮のゆらぎのゆるくして
底ひの砂の白き貝見ゆ

手賀沼の沼辺に暮らし、沼辺の沈静な詩情を好んだ和周は、周囲の風景を描き、また、歌にしたのである。和周の画家仲間には、「彼の詩的情操は歌に依つて得られていて、自由な境地を歩いていた」と評する者があつた。しかし、和周の絵画には、まだ彼の歌にあるような自由な詩的感情が、あまり出ているはなかったのだと

いう。

大正十二年三月以降は、志賀直哉一家が、京都に移住した後の我孫子弁天山の志賀別邸の母屋に住み（注15）、訪ねて来る青年画家や歌友たちを受け入れ、心からもてなし、交友の盛んに行われていた時期なのであつた。しかし、和周の『雲の流れ』には、ひとり、わびしい思いを抱え込み「わがころみつむることくわびしきかさむ」と詠った一首があるが、同様の心で詠われた大正十三年の歌二首が残されている。『宿』とは、我孫子宿のこと、我孫子町の中心部、現在の我孫子駅付近一帯を言う。当時の『宿』の家々にはどのような灯がともっていたのであろうか？

宿の灯の見えずなるまで来し丘の
盡きなむとして蛙の聞ゆ

丘のつくる断崖の上になうづくまり
ものを思へば蛙なきいづ

和周にとり、沼こそが淋しい心を映す鏡であつたが、夜の我孫子の町の灯が屈かぬ場所―沼に向かつた「丘」や「断崖」とは、心の奥に抱え込んだ病や作画の悩みなど、「わびしい思い」を吐露する場であつたかと想像される。和周の作歌は十九年間に亘り、多くの歌を作りながら殆ど他人には見せようとせず、自分ひとりで読み満足していたようである。いかにも和周らしいありようで、逝去後、妻の睦でさえ初めて見ることの多い、和周の歌の数々であつた。（次号に続く）

【注釈】

（注1）窪田空穂（くぼた うつぼ 明治十年六月八日～昭和四十二年四月十二日）：長野県和田村（現松本市）生まれ。本名通治。松本中学在学中、「文学界」等を読み、文学に憧れ、明治二十八年養家を出奔し、東京専門学校（現 早稲田大学）文科へ入学、明治三十二年太田水穂を知り、作歌を始める。明治三十三年与謝野鉄幹選の「文庫」に投稿、四月に創刊された「明星」に参加。明治三十四年退会。明治三十六年、「電

報新聞」短歌選者となり、明治三十八年、同紙への投稿の青年たちと十月会を結成。独歩社、紫明社、女子美術学校英語教師等を経つ、文筆生活を続け、自然主義思潮の中で小説を書く。大正三年六月「国民文学」を創刊。大正九年には、早稲田大学講師となり、後教授となる。また、同年歌誌「地上」、「朝の光」が創刊されると、これらと関係を持つ。大正十五年（昭和元年）二月、早稲田大学学生をメンバーとする「槻の木」、さらに昭和二十一年三月「まひる野」を創刊する。芸術院会員、文化功労者。

代表歌

鉦鳴らし信濃の国を行き行かば

ありしながらの母見るらむか

（処女歌集「まひる野」）現代短歌大事典（篠弘・馬場あき子監修 2000年6月 三省堂）

（注2）空穂系短歌雑誌『白樺（しらがし）』：会報「あびこの文化」第192号9頁～10頁、《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る：その1 どこに住んだのか、どのような暮らしがあつたのか》（注2）「空穂系短歌雑誌」の記述を参照。

（注3）原田喬氏所蔵資料：原田喬氏は、原田京平・睦夫妻及び夫妻の長女麻那の作品、関係資料等の継承者である。原田麻那は、喬氏の義母。

（注4）『地上』（第二次）：短歌同人雑誌。窪田空穂が、大正三年六月に創刊した『国民文学』から分かれて、大正九年三月、弟子の対島完治が創刊、主宰となった。空穂は顧問となり選歌も担当した。また、宇都野研が、空穂を慕い空穂を指導者として頂き、大正九年三月短歌雑誌『朝の光』を創刊した。関東大震災後の大正十三年一月、『国民文学』『地上』、『朝の光』三誌が合併し、『国歌』が創刊される。さらに、翌十四年六月には『国歌』が解体され、同年七月『地上』と『朝の光』が合併し、『白樺』が創刊される。昭和四年一月に『白樺』が解散され、二月には『地上』と別れ、宇都野が『勁草』を創刊。この『白樺』が解散し、『地上』のみとな

つたのを『地上』第二次と呼ぶようである。

(注5)「十余年」：遺歌集「雲の流れ」の序の中に「十年に余る交渉」、また、編さん・発行者である原田睦による〈あとがき〉にも、「彼が十余年敬慕の心もて師事」と書かれている。

(注6)割田斧二(わりた おのじ)：生没年不詳。歌集に「心曲」がある。空穂による割田については、〈心曲を読む〉(窪田空穂全集「第十二巻 近代短歌論 昭和四十一年九月 角川書店」)がある。

我が歌

折々に湧き来る情消え難く

胸よ透けとて我が歌は詠む

歌詠むに心の鬱の消えゆけり

忘れよと思ふその詠める詩も

(注7)宇都野研(うつの けん)：明治十年十月、昭和十三年四月。愛知県額田郡本宿村の医家の長男として生まれる。本名研(きわむ)。明治四十年、東京帝国大学医学部卒。明治四十五年、東京本郷に小児科医院を開業。大正六年、短歌を始め竹柏会に入会。大正九年、空穂を指導者として歌誌「朝の光」を創刊。歌集「木群(こむら)」がある。空穂による宇都野については、「木群」序・宇都野研君をおもふ(窪田空穂全集「第十二巻 近代短歌論 昭和四十一年九月 角川書店」)がある。

その他の参考書には、「宇都野研年譜」(宇都野研全集「全二巻 宇都野龍一編さん 勁草社 昭和十三年十一月」)がある。

代表歌

秋の日の夕日大きくまともなり

野辺の穂すすき炎とぞなる

事切れし子にし哭きつるその手して
賜びたる銭をふところにしぬ

空穂による追悼歌

鼻毛ぬき面疔となりて死ねりとや

医師の宇都野よ何たることぞ

(歌集「冬日ざし」)

(注8)最後の歌十一首：遺歌集「雲の流れ」(原田和周著、原田睦編さん発行 裕伊之助(はざま いのすけ)装幀 昭和十一年五月)収載の十一首。会報「あびこの文化」第192号9頁(世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る)その1「どこに住んだのか、どのような暮らしがあったのか」(注1)の(昭和十一年 病重りて最後の歌十一首)を参照。

(注9)随筆「珍しみと懐かしみ」：この随筆の初出は、歌誌「楓の木」にあり、表記は「珍らしみと懐かしみ」である。昭和十一年一月に和周が逝去し、空穂により直ちに書かれ、同誌の同年三月号に公表された随筆である。(窪田空穂全集「第六巻 紀行随筆二 随筆II 昭和四十一年六月十五日 角川書店」)。

この随筆は、大正十四年、空穂が早稲田大学国文科の学生染谷進を伴って、我孫子手賀沼畔の原田和周邸(當時は志賀直哉の別邸)を訪れた時のことを記した訪問記であるとともに、早世の和周への追想文でもある。

この随筆の中に、「和周も小田急沿線の千歳船橋に家を建て、一本十銭で買った木が見上げるようになったなどと話していた」というくだりがある。

(注10)自歌自釈「手賀沼」：昭和十一年の一月、原田聚文が逝去して直ちに書かれた「珍しみと懐かしみ」に漂う、聚文を失った師空穂の悲しみが、三十年を経過しても、まだ空穂の中に深く残っていたことが理解さ

れる。大正十四年、空穂が聚文に招かれて我孫子手賀沼畔を訪れた際に詠んだ短歌二首(「鏡葉」に収載)について、四十年後の昭和三十九年夏、八十八歳となった空穂が自歌を自釈し、まとめたもの。

(窪田空穂全集「第七巻 歌論1 三自歌自釈 鏡葉

手賀沼 昭和十年十月十五日 角川書店 初出)

松林行く行く見ゆる古き塚

いにしへ人は土に籠れる

古塚のまろきが並ぶ人生きて

親しみにけむ沼見ゆる丘に

(注11)「楓の木」：早稲田大学国文科の学生たちの間で空穂を中心に、大正十五年(昭和元年)二月に創刊された。平成二十二年十一月に原田喬氏家を訪問した際、筆者は、和周が「楓の木」の為に描いたと推察される同誌の表紙画の原画を見つけた。画家である和周は、同誌の同人ではないが、表紙画を描くことにかかわっていたのかも知れない。

(注12)「郷愁」：窪田空穂全集「第二巻(昭和四十一年七月二十五日 角川書店)収載。また、同全集同巻収載の第十四歌集「冬日ざし」には、空穂が和周を追想して詠んだと思われる歌二首が記載されている。

今は亡き^な原田が持て来し朝鮮の

古代の花^い瓶^よ見つ久しも

この瓶や幾代の陶工こころ籠め

焼き重ねけむ色のめでたさ

ちようか

(注13)長歌：長歌とは、五・七音節の短・長句を二回以上繰り返す、

五七七で結ぶ歌体(こと)で、長歌の伝統は「万葉集」で途絶え、近代になつても伝統詩の趨勢は短歌であつて、実質的には滅亡した形式であるが、これに生氣を与えて現代に甦らせ持続的に作歌を試みたのが空穂であつた(現代短歌大事典「篠弘・馬場あき子・佐佐木幸綱監修 2000年6月 三省堂」)。

参考までに、「鏡葉」の中の、家庭生活の一場面(生活の中の喜び)を詠った、空穂の代表的な長歌一首(大正十年の作)と反歌を掲げておく。なお、反歌(はんか)とは、和歌の長歌のあとに加えられた短歌。一首

または数首で、長歌の意を補足したり、その大意を要約したりするもの。「万葉集」に多く見られる。

祝

二人子の進級祝ひに、わが歌集できし祝ひと、この夕店屋もの取柄は、打集ひさわぎて食へば、祝ふこと持たぬ手童、それさへに共にさわぎて食ふや己が物。

祝ひぞといひて食らへばいささかの

鰻添ひたるうなぎ飯うまし

「窪田空穂全集」第二巻 歌集Ⅱ(昭和四十年七月二十五日 角川書店)

〔注14〕島田久兵衛別荘：参考文献としては、〈我孫子最初の別荘〉「あびこ歴史散歩 我孫子市史跡・文化財案内」(我孫子市教育委員会 平成23年3月)がある。

〔注15〕我孫子弁天山の志賀別邸の母屋に住み：会報「あびこの文化」第194号6頁、《世田谷の頃の新田京平ファミリーを知るその2 加藤充子氏が語る、聚文画室(旧桜丘原田京平宅)の紫陽花のこと》収載の(注1)志賀直哉の別邸を参照。

プロジェクト報告

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌その24)

瀬を早み 岩にせかる 滝川の

われても末に あわむと思ふ

(77)

【現代語訳】

川の瀬の流れが速く、岩にせき止められた急流が2つに分かれる。しかしまたひとつになるように、愛しいあの人と今は分かれても、いつかはきつと再会しようと思っている。

【語句】

【瀬を早(はや)み】「瀬」は川の浅いところ。「くを十形容詞の語幹+み」と続くと、理由を表す言葉になる。ここでは「川の瀬の流れが速いので」という意味。【岩にせかるる滝川の】「せかるる」は「堰き止められる」という意味の動詞「せく」の未然形で、後に受動態の助動詞「る」が付く。【滝川】は、急流とか激流という意味。上の句全体が序詞で、下の句の「われても」に繋がる。【われても末(すゑ)に】「われ」は動詞「わる」の連用形で、「水の流れが2つに分かれる」という意味と「男女が別れる」という意味を掛けている。「ても」は逆接の仮定で、「たとえ〜したとしても」という意味なので「2つに分かれてたとしても後々には」という意味になる。【逢はむとぞ思ふ】「水がまたひとつに合う」と「別れた男女が再会する」の2つの意味を掛けている。

【作者】

崇徳院(すとくいん。1119〜1184)鳥羽天皇の第一皇子で、1123年に5歳で天皇の位を譲り受けた。18年の在位の後に近衛天皇に譲位し、鳥羽上皇(本院)に対し新院と呼ばれた。鳥羽上皇の死後、後白河天皇との間で、後の天皇にどちらの皇子を立てるかで対立、戦となる(保元の乱)が破れ、讃岐(現在の香川県)に流され、46歳で没した。在位中に藤原頼輔に『詞花和歌集』を編纂させている。

この歌は崇徳院が1150年に藤原俊成(しゅんぜい)。



定家の父に命じて編纂させた「久安百首」に載せられた一首。

怨霊伝説

崇徳院は日々の暮らして溜まった写経を「どうか、寺に納めて欲しい」と朝廷に送ったところ、後白河天皇が「呪いが込められているかも・・・」と言って受け取らず、突きかえされてしまう。送り返された写経に、自分の舌を噛み切つて流れ出た血で「大魔王」となつて、この日本の国を転覆させてやる〜と、誓文を書きつづつて海に沈め、以来、髪も切らず、爪も切らず、その風貌は「生きながら天狗になった」と噂されるほどの変貌を見せる。そして、とうとう長寛二年(1164年)8月26日、鬼のような姿のまま、崇徳院は46歳で、この世を去る。生前は、「いつか都に戻りたい」と願っていた崇徳院だったが、死んでもなお許されず、その遺骨は、四国の白峰山に埋葬された。埋葬時には、一点にわかに掻き曇り、激しい風雨が襲い、突然の雷鳴も轟き、その棺からは真っ赤な血が流れ出し、その火葬の煙は都に向かってまっすぐになびいたと言う。

都には疫病が流行り、祟りと称される異変が次々と起こった。平治元年(1159年)に起こった平治の乱でさえ、もともとは崇徳院の怨念の仕業とまで囁かれる。恐れおののいた後白河天皇は、それまで、彼が「讃岐院」と呼ばれていたのを、「崇徳」という神々しい名前を贈つて、崇徳院の名誉回復に当たった。

関連狂歌

君とわれ口を寄せてぞ寝まほしき

鼓も腹も打ちたたきつ

焼つぎにやりなばよしや此徳利
われても末にあわんとぞ思ふ

今月の歌(恋の歌その25)

思ひわび さても命はあるものを

憂きに堪えぬは 涙なりけり (88)

【現代語訳】

つれない人のことを思い嘆きながら、絶えてしまいかと思つた命はまだあるというのに、辛さに絶えきれずに流れてくるのは涙だったよ。

【語句】

【思ひわび】つれない相手に思い悩む気持ちを表し、恋歌によく使われる。【命はあるものを】次の「涙」に対して「命は死なずに残っているのに」という意味を表す。【憂きに】「憂し」の連体形で、想いがかなわない憂鬱の意味。【堪へぬは】「堪ふ」の未然形で「こらえる」という意味。全体として「こらえられないのは」という意味になる。【涙なりけり】「けり」は詠嘆を表す終助詞で「涙だったんだなあ」というような意味を表す。

【作者】

道因法師（1090～1182年）藤原敦家。従五位・左馬助だったが、80歳を過ぎてから出家した。晩年は比叡山に住んだが、非常に元気で、90歳を過ぎてからも歌会に出て講評を熱心に聞いていた。歌好きだったからか、死後、千載集に多くの歌が掲載されたのを喜び、選者・藤原俊成の夢に出てきてお礼を言つたという逸話が残つてゐる。



関連狂歌

おもひ侘びさても命はあるものを
うきに絶えぬはなんだべらぼう

嬉しいにつけ悲しいにつけ泣き上戸

憂きにたへぬは涙なりけり

思い回しきても命があるものを

うきにこぼすは涙なりけり

渡りえてうき世の橋を詠（なが）むれば

さても危うく過ぎしものかな

参考文献

淡光ムック 百人一首入門 有吉保・神作光一 監修
（淡光社）
インターネット百人一首各種投稿文

あびこだより109号

柳宗悦と兼子

「二人の個性はどっち迄もどっち迄も
活きねばなりません」

竹下 賢治

柳宗悦と中島兼子の出会いは、二人それぞれが未来への展望を拓こうとしていた時期と重なります。柳は学習院高等科を恩賜の銀時計を授与され卒業。東京帝大哲学科に入学し、雑誌『白樺』同人として創刊以来幾つかの論文を掲載中。兼子は東京音楽学校本科でベツオール指導の下、西洋唱法を習得し初舞台を踏んでいます。一九一〇（明治四三）年前後、宗悦二十歳・兼子十八歳の頃でした。以来、結婚までの五年間に二人が交わしたラブレターは二七〇通余り。サブタイトルの「二人の個性はどっち迄も、どっち迄も活きねばなりません」は柳が兼子に宛てたラブレターの中の一節です。「どうか女性としての使命を私に於いて全うして下さい。同時に自分は、藝術家としての貴方の使命を全うする事に、出来得る限りの力を尽す覚悟で居ます」と宣言しています。愛と生活とが一致し、愛と仕事とが調和される「理想の愛」といえましよう。



二人はこの後結婚し、へ理想の愛を貫いていくことになるのですが、それぞれがどのような家庭環境に育ったのか気になるところです。

柳は兼子に「二人の個性を活かす」と告げました。これはイギリスの宗教画家で、銅版画職人にして詩人、キリスト教会の異端児として非難された、ウィリアム・ブレイクの思想（「肯定の思想」）の研究から得たものです。「対立する二者のうちの二者を否定するのではなく、二者をそのまま受け入れる（肯定する）」という考えです。例えば、「美と醜」は対義語で相容れませんが、一方で誰しも人である以上、心身の内に美も醜も抱えています。それこそが「個性」です。「芸術は美よりも個性の表現」という言葉もあります。これは「二元的一元論」と言われ、この後、柳が生涯をかけて追究していく柳思想の根幹にあり続けました。



一九一四（大正三）年、二人は結婚。やがて我孫子に転居します。夫婦として、父母としての新しい生活はどうであつたのか。長男の柳宗理は次のように語っています。「特に興味あることは、宗悦は彼女（兼子）の芸術家としての行為と、家庭人としての女の務めが、両立することの可能性を、彼女の将来の中に見出し得ることを、確信を以て述べていたことだった。しかしこの問題は結婚後、彼女が現実として味つた最も困難な問題として、幾度か躓きそうになつたのである」と。

結婚後の家庭人兼子をよく知る身近な方々のお話から窺える夫婦の姿が今回のテーマです。

「放談くらぶ」で竹下賢治氏が講演
日時 12月17日（日）14時～16時
会場 我孫子北近隣センター並木本館
演題 「柳宗悦と兼子」

谷村新司の訃報——と「昴」

谷村新司の訃報が入ってきた。谷村新司はシンガーソングライターとして数々のヒット曲を飛ばし、世代を越えたファンに親しまれていた。ヒット曲の中でも私の周りで「昴—すばる」はカラオケなどでも歌う人が多い。

「すばる」の語感(私だけかも知れないが、車のスバルが連想されるためか)日本語としては、少し違和感があるが、調べてみると「プレアデス星団」を表すれっきとした和名という。「プレアデス星団」は冬を中心に秋から春にかけて観測でき、肉眼でも5～7個の星の集まりを見ることができるようだ。「すばる」という読みは、「統一する」の「統」が語源。星団がまとまっていることから、「まとめる」という意味がある「統ばる(すばる)」が当てられた。

ということで和名の「すばる」は古くから使われていて平安時代の「枕草子」にも出ていることが、今回分かった。「枕草子」は冒頭、「春はあけぼの・・・」で始まることはご存じの通りだが、「○○は・・・」という表現があちこちに出ており、最後の方に「星はすばる」と出てくるのではないかな。

「星(ほし)は、昴(すばる)。彥星(ひこぼし)。明星(みやうじやう)。夕星(ゆふつづ)。流星(よばひぼし)、尾(を)だに無(な)からましかば、増(ま)して。」とある(枕草子)。

漢字の「昴」には下の部分に「卯」があるが、十二支の中の「うさぎ」、つまり「卯(う)」が「昴」の原型である。「卯」の方角にあったのが、「昴」という星だったということらしい。「昴」はこれに太陽を意味する「日」が加わったもの。「日」は、「空」「天体」を表す漢字でもある。

話は変わるが、「昴」と言えば、小学校時代から付き合っている親友に「昴(あきら)」君がいる。愛称は「あっちゃん」、勉強もよくでき、スポーツ万能で毎学年、1学期の学級委員を務めていた。彼はカラオケでは必ず谷村新司作曲の「昴—すばる」を歌う。そのため周りの我々は決して同じ歌、つまり「昴」を歌わなかった。「あっちゃん」がある時、「これは自分の名前と同じだから」と言ったことがある。しかしよく見ると二つの漢字は微妙に違いがあり、別の漢字である。ふたつの漢字とも上部は同じ「日」だが、「日」の下は「卯」と「印」であり、似てはいるが読み方も意味も全く異なる漢字である。「昴」の読み方は、「コウ」「ゴウ」「ギョウ」「あがる」「たかい」「たかぶる」の6つ。「あっちゃん」の「あきら」という読みはこの6つの中にはないが、人名漢字として昔から使われていたのだろう(人名の場合、読み方は自由である)。この「昴」が発売されたのは1980年4月。その後、この曲のヒットとともに子供の1文字の名前として多く使われたようで、その結果だろうか10年後の1990年4月に人名漢字として使えるようになった。「あっちゃん」がこれら二つの漢字が明確に違うことを承知で「昴」を十八番にして歌っていたのか、今さら確かめようがないが、自分の名前のことなので間違える筈はないだろう。

ちなみに、「昴」の「卯」は、「柳の木」の「柳」に使われているし、「昴」の「印」は、「歓迎会」の「迎」や「仰げば尊し」の「仰」という漢字に使われている。正直に言うと、この使い分けについて私は今までいい加減に書いていたような気がする。これからははっきりと区別して書くことができる。(美崎)

川風の気持ちよく吹く中、船頭兼ガイド氏の説明を聞きながら、美味しい昼食をいただいた。



十月十七日、これ以上ないというほどの好天氣に恵まれて、参加者二十一名、六軒川・弁天川・手賀川などを巡る「川めぐりと木下史跡散歩」に出発した。まず、印西市中央公民館で資料をいただき、「手賀沼の外来生物等の実態」「手賀沼干拓・水害の歴史」などのお話を聞き、次に地域の治水・開発に大きな役割を果たしたという排水機場を見学し、いよいよ印西発作地先六軒大橋下の乗船場から二艘の船に分かれて乗船、出発した。

納見 美恵子(会員)

「川めぐりと木下史跡散歩」に参加して

きおろし



途中、思いもかけないほど大きな魚が船の近くで、水中から飛び跳ねてびつくりしたり、発作橋近くではコブハクチョウの優雅な群を見たりすることができた。

木下河岸(きおろしかし)は、利根水運が盛んになるにつれ、利根川・江戸川に作られた河岸の一つだが、ここは北総台地の豊かな木材や薪炭や竹の産出地を背景にして栄えたという。そして河岸は寄場(よせば)的な存在ともなり、明和年間には穀物問屋や酒造業・青物市場などが設けられた。又、この河岸からは、鹿島・香取への遊覧、成田詣での旅人を輸送する小舟も出船していて、こうした旅人を対象とした旅籠や料理屋も軒を並べ、賑わったという。

下船後、ふるさと案内人の方を先導として木下の史跡散歩に移った。河岸から、江戸の本行徳河岸まで続く木下街道は利根川の渇水期には、銚子沖で獲れた魚介類をここ木下河岸で馬に積み替え、陸路行徳まで運ぶ、そんな用途でも賑わったとか。

次に行った木下万葉公園近くでは木下貝層というびつくりするほど貝の化石が詰まった地層や化石を含んだ大きな岩、見事な常夜燈などを見た。

改めてこの地が、大昔、海の中にあつたことを確認させられた。

しかし、この穏やかな土地も、長い間、洪水などに苦しめられたと両ガイド氏は話された。

手賀沼が利根川よりも低い水位であるために、大雨などで利根川が増水すると、たちまち沼の水が溢れて近郷は洪水に見舞われたという。度重なる治水工事も成果なく、新田の開発も進まなかった。

しかし、終戦と共に、国が食糧増産事業の一つとして手賀沼排水機場を作ると、これにより手賀沼の水は落ち着き、沼の多くの部分の土地の開拓も成功した。

家に帰り、あらためて地図を開くと手賀川沿いに片山・手賀・布瀬などの新田が碁盤の目のように整然と並んでいるのが確認できた。改めてこの地図を見ながら、帰りの車窓から眺めた、まだ緑の残っている櫓田(ひつぢだ)(注が豊かに広がる農地を重ねた時、ここに至るまでの、この地に生きた人々の長い長い年月と努力がしみじみと感じられた。

(注) 櫓田 刈ったあとの株から再び伸びる稲(編集者)。



映画「福田村事件」を観て

虐殺事件の発生

関東大震災の後、千葉県福田村(現野田市)で行商団が被害された事件を題材にした劇映画「福田村事件」が、震災100年となる九月一日に全国公開された。当初、大手映画会社での上演は難しいと言われたが、世間の評判が影響したのか、つい最近一部の手映画会社も上映を始めた。筆者も封切後間もない日に観に行った。

事件は震災5日後の大正十二年九月六日に起きた香川県(の被差別部落から来た某の行商の一行が、讃岐(さぬき)弁を話すことで朝鮮人と決めつけられ、自警団に襲われたのだ。行商団の十五人のうち、幼児や妊婦を含む九人が惨殺された。当時、福田村以外でも「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などの流言飛語を真に受けた人々が、朝鮮人を殺傷する事件が各地で相次いでいた。事件を取材した「福田村事件」関東大震災・知られざる悲劇の著者で、映画化に協力した辻野弥生さん(流山市)は、地元で著書や映画化に否定的な反応もあったことを明かしている。「虐殺に走った人たちが特別に残虐だったわけではなく、私もあの時代にあの土地にいたら、竹やりを持って駆けつけたと思う」と当時の集団心理や差別意識に触れた。その上で、「(史実を)なかったことにしたい風潮が漂っている。どんなに都合の悪い歴史でも、学ばなければ明るい未来はない」と語った。(インターネットより)

監督はあの森監督

映画は、行商団の殺害実話に基づいているが、周辺に挿話を入れたフィクションになっている。オウム真理教信者に迫ったドキュメンタリーなどを手がけた森達也監督(これが初めての劇映画)は、集団や組織が持つ同調圧力や暴走のリスクを指摘している。福田村と同様の事件は歴史上、国内外で起きており、「人が集団に帰属することは当たり前だが、個を保つことが大切。集団が暴走を始めたときに、なんか変だぞ、と思う気

持ちを持つだけでも違う。『一人称単数の主語』を持つことが必要です」と森監督は語っている。

時代背景

このような事件が発生した当時の時代背景を見てみると、いわゆる「大正デモクラシー（民主主義の発展、自由主義の運動、風潮、思潮）」の時期で、社会運動の広がりの中、労働者の団結、ストライキ、労働条件の改善などを求める労働争議や小作料の減額を求める農民の運動の小作争議、またさまざまな社会的差別からの解放、具体的には部落解放運動（全国水平社の結成1992年）、女性差別からの解放運動（平塚らいてうの活動）が起り、ひいては1925年には普通選挙が実現されるほどデモクラシー（民主主義的）気運が高まっていた時期であった。一方で、それだからというか、軍国主義の国体はそのまま、社会主義や共産主義の活動を取り締まる力も一段と厳しくなり、そのための法律（治安維持法1925年）が成立した時期でもあった。

事実とフィクションによる映画

まだ観ていない人に対して「ネタバレ」になるので「あらずじ」や結論はここでは書かない。映画の中心のテーマはドキュメンタリー仕立てになっているが、その史実・事実を取り巻く形で、いくつかのフィクション挿話が追加、加味され、織り交ぜられながら映画は構成されている。実際問題としてこれを映画でなく事実だけに基づくドキュメンタリー作品として製作するとしたら、100年も前の話なので当時の実際のフィルムもなくそれほど長い作品にはならないだろう。2時間ほどの作品にするには映画にして挿話（フィクション）で膨らませるしかない。フィクションとしての挿話は①戦争時の留守家族の生活、心理②地方の村の閉鎖性、「下等者」に対する差別、排他性③当時の少数派インテリ層の非力さ④人間の本能、欲望⑤部落問題、などで、その中には今でも現代人の課題に通じるものもあり、結果として作品本来のテーマを浮き立たせるとともに映画の完成度を高めることになったのではないだろうか。

方言に馴染み

私がこの映画を観て個人的に共感を持った一つの理由は、私の両親が四国出身（父親は徳島、母親は香川）であることだ。被害者が讃岐（香川県）の被差別部落から来た行商人の一人というところで映画の中で方言が使われていた。例えば「やけん（だから）」とか、会話の終りを「やのう」で締める話し方など。私自身は東京で生まれたが、両親やその親戚の者が話す方言を子供の頃から聞いてきたので、映画の中の会話はスムーズに入り、また懐かしく聞いたのは事実である。現在では差別用語であるが、「えた」などの表現は直ぐに意味を理解した。映画の中では「えた」と「朝鮮人」はどちらが上か？などのセリフもあった。

私の父も徳島の田舎から出てきたいわゆる古いタイプ（明治生まれ）の人間なので「エタ」や朝鮮人に対する偏見（蔑視）があったと思う。映画の中で日本人が朝鮮人かどうかを判断するのに自警団の人間が「十五時十五分と言ってみろ！」という箇所がある。朝鮮人は濁点（濁音）が正確に言えないということからのセリフである。私は子供の頃「ちようせん、ちようせん」ばかりするな、おなちこめくつてどこかう（朝鮮、朝鮮と馬鹿にするな。（日本人と同じお米を食ってどこが違うのか）と朝鮮人を揶揄する言葉を何度も聞いたことがある。

森監督との車中会話

映画の中身とは異なるが、実は映画が公開された九月一日の翌日の深夜、我孫子駅のタクシー乗り場で森監督に偶然出会った。森さんは私の家から五〇メートルほどの处にお住まいで、今まで朝のゴミ出しで一、二度お会いしたことがあり、挨拶を交わしたことがある。その日は帰りが夜の十二時と遅くなり、また日曜日ということでバスは無く、タクシーを待っていた。私のすぐ後ろに偶々森さんが並んだのを私は認めた。タクシーの台数も少なく三十分くらい待っただろうか、タクシードライバーが来たので「森さん、一緒に乗りませんか？」と声をかけた。森さんは私が前に居たことに気が付いていなかったようで、少し驚いた表情を見せたが、この後またいつ来るかわからないタクシーを待つのも大変

と思ったのか、「すみません」と言いながらタクシーに乗ってくれた。森さんは当日大阪の仕事からの帰りで遅くなったという。

私は折角の機会と思い、タクシーの中で「福田村事件」の映画についていくつか聞いてみた。

映画の中核となった辻野弥生さんの著書「福田村事件……」（前掲）は当初2013年3月に斎書房出版から発行されたが、斎書房が廃業となり、今年の6月に「五月書房新社」から再出版されたことを教えてくれた。「森さんが我孫子にお住まいであることをあまり知られてないのでは？」の質問に対しては「知られない方がいいんです」と、やはり話題作、問題作を出している監督らしいお答えだった。「映画は、今回たまたま九月一日という関東大震災の日で封切となったが、これは偶然で、企画し始めた三年前から意図したものではない。偶然、そうだった」とのこと。今回の映画上映の前にNHKの番組で取り上げられたが、そのインタビューは森さん宅で行われたようで「どこかのホテルでもよかったのに」と言っていた。森監督は、かつてオウム真理教のドキュメンタリー映画で話題になったが、当時の上祐史浩氏とは何度もあつて話をしたと言った。

我孫子での虐殺事件

ところで既に何人かの方が指摘をされているが、当時我孫子でも同じような事件があったことが記録されている。

『我孫子市史 近現代篇』に「関東大震災と我孫子事件」の項目に以下のような記述がある。

「……我孫子町でも、八坂神社境内で、三日および四日、三人の朝鮮人が自警団によって殺された。（中略）政府は、偏見と誤情報をもたらした大混乱と恐怖の要因を問うこともなく、九月二〇日頃から、朝鮮人殺害にかかわった自警団関係者の検挙をはじめた。我孫子町からは、「〇〇外五名」が「〇〇外二名」を棍棒杉丸太等を以て三人を殺害した「騒擾殺人罪」で起訴された。十一月一九日には、このうち五名に懲役二年、一名に懲役一年六カ月の求刑がなされている。……」（原文では〇〇は固有名詞）（T.M）

四十三回短歌の会(最終採択の一首)

九月二十六日実施

桃色の雲のごとくに盛り上がり
炎暑の空に百日紅咲く

村上 智雅子

年ごとに己を締むる^{たが}箍ゆるむ
風に吹かるる枯れ葉かわれは

納見 美恵子

悪妻のはなしに花咲く酒の席
くちには出せぬぞ感謝のことば

佐々木 侑

パノラマに上がる大輪四年振り
ビール片手に心も声も

芦崎 敬己

「寛解」の言葉教えてくれた友
我より重き手術歴あり

「寛解」一時的に、がん腫瘍が縮小または消失
しているが、まだ再発の可能性は残っている状
態(演習者注)

美崎 大洋

折り節の心の壁に風吹きて
のうぜんかづら朱の花散らす

伊奈野 道子

藍^{あい}ふかき紫陽花の毬手に重く
朝露しとど冷たきものよ

大島 光子

文学掲示板

令和六年一月展示作品(文学の広場)

意識なき友を見舞ひて耳元に
わが名告ぐれば暇ひらきぬ

八千代市 藤川 綾乃

孫受驗に正月来れぬと娘言ふ
はや教育ママになりしかと思ふ

我孫子市 美崎 大洋

名にひかれお日様グリア窓に置けば
雨にも咲けり昨日も今日も

我孫子市 大島 光子

夜に入りて獣のごとく風吠ゆる
老い夫なれど今宵たのもし

柏市 納見 美恵子

空腹なりし昭和のそらにあかこんぼ
羽根も振るなく校庭に舞ひき

我孫子市 佐々木 侑

一つ事終ふれば次の仕事あり
原稿八つ締切近し

我孫子市 三谷 和夫

当会の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 12月17日(日)14時〜16時

会場 我孫子北近隣センター並木本館1

講師 竹下賢治氏

演題 「柳宗悦と兼子」

参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL71850675 佐々木まで

(12ページ「あびこ」日より「参照ください」)

□プロジェクト「短歌の会」

第四十四回短歌の会

日時 11月28日(火)13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

◎見学ができます(080-3410-4426(美崎))

新型コロナウイルス

新型コロナウイルスの全国の感染状況は、厚生労働省によると9月24日までの1週間に全国およそ5000の医療機関から報告された新型コロナウイルスの患者数は前の週から3万2164人減つて5万4346人となった。また、1つの医療機関当たりの平均の患者数は11.01人で前の週の0.63倍となった。厚生労働省「減少傾向が続いていてピークアウトの可能性がある。今後感染対策を続けて欲しい」としている。

一方、インフルエンザの感染状況については、厚生労働省によると、9月17日までの1週間に全国およそ5000か所の医療機関から報告されたインフルエンザの患者数は3万4665人で、前の週からおおよそ1.5倍に増えている。

編集後記 最近、一段と、英語のカタカナ表記の言葉が増えたような気がする。少し沈静化した後のコロナの状況は「アフターコロナ」と表現する。いわゆる「コロナ後」である▼アフターコロナで早速変化が出たのは旅行業での人の移動だ。海外から日本に来る外国人はカタカナ表記では「インバウンド」と言い、日本から海外に出るのを「アウトバウンド」と言う。この言い方は本来マネジメント用語で業界によって意味が異なるらしい▼旅行業によるインバウンドもアウトバウンドも自由外国に行ったり来たりできるのは平和だということ。ウクライナ、イスラエルなどの戦時下ではこうはいかない▼旅行と言えはかつて国鉄(当時)による大規模な旅行誘致キャンペーンがあった。そこで使われたのが谷村新司が作詞・作曲した「いい日旅立ち」である。「いい日旅立ち」はそのスポンサーであった日本旅行(日旅)と日立製作所(日立)両社の文字「日」「旅」「立」を入れた題名だという。少し過ぎ過ぎた話のようだが、事実らしい。(美崎)